

## 唐代における水関と関市令

吉 永 匡 史

### はじめに

古来より、人々の往来は様々なものを双方向的にもたらした。それは人間自身の移動だけでなく、人々が付帯する多種多様な物資・情報・知識も行き交うことを意味し、異なる地域間の交渉による相互発展・衝突が生起したのである。しかし、この往来はあらゆる境界を越えて無制限に許されたのではなく、殆どの場合、国家（もしくは当該地域を統治する権力主体）によって制限を受けた。その代表としてまず挙げられるのが、関である。

関が設置された場所は、交通の要衝である。ただ、その性格や檢察のあり方は、設置場所によって少なからず異なってくる。すなわち、陸上の道路を塞ぐようにして設けられた陸関か、もしくは渡河点に設置された水関か、という地理的要素に左右される。

そもそも中国における関の発生は、古く先秦時代まで遡る。春秋時代では、いまだ各国が領土国家に発展せず都市国家の段階に留まっていたため、関は国都の近傍に設けられることが多く、その主たる役割も他国の使者を初めに迎接する場であつたとされる。<sup>(1)</sup>これ

に、軍事防衛拠点としての性質や、通行税である関税を徴収する経済的性格が追って加わっていった。

その後戦国時代に入ると、領土国家としての体裁を整えていくにつれ、国都周辺だけではなく、国境や国内交通の要衝に関が多く設置されるようになる。戦国楚では陸路・水路ともに関が置かれていたようであり、行人の馬・牛・羊や荷物に対し関税が課されていた。<sup>(2)</sup>また戦国秦の西方領域の地図である甘肅省天水放馬灘秦墓出土地図には、渡河点の関が複数描かれている。<sup>(3)</sup>藤田勝久氏の考察によれば、戦国秦は前線に「県」を設置するとともに、周辺またはその先に関を設ける方式で、支配領域を拡大していった。<sup>(4)</sup>そして関における檢察は、公文書の開封をはじめとした交通のチェック機能と、物品の出入という経済的チェック機能をさらに拡充していくことになる。この段階で、関は「交通と軍事上の目的」と「経済的目的」の両者を併せ持つ存在へと形作られていくのである。今回の主な検討対象である中国唐代でも、陸関と水関において厳しい勘検が実施されていた。<sup>(5)</sup>

本稿は、このうち主に唐代の水関に焦点をあて、考察を行うもの

である。具体的には、二〇〇六年に卷二二以下の全容が公表された北宋天聖令のうち、関市令の宋2条を取り上げ<sup>④</sup>、その対応唐令の復原検討を通じて、水関における検察の様相の一端を明らかにしたいと考える。さらに、水関のなかでも重要な事例として蒲津関を取り上げ、関市令規定との関係性に注意しつつ、唐代における関の検察の実態に迫っていききたい。

## 一 天聖関市令宋2条と対応唐令

これまで水関にかかわる唐令条文は、『唐令拾遺』と『唐令拾遺補』においてわずかに一乙条「諸度<sup>二</sup>関津<sup>一</sup>、及乗<sup>三</sup>船筏<sup>一</sup>上下<sup>二</sup>経津者<sup>一</sup>、皆当<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>過所<sup>一</sup>」が復原されたのみであり、令にどのような形で規定が存在したのか不明瞭であった。しかし、唐令を藍本としての規定された北宋の天聖関市令を通見すると、宋2条に水関についての規定を見出すことができる。本条は関における行人の勘過について、次のように定める（傍線部分は唐令復原が可能な箇所。後述）。

諸行人度<sup>レ</sup>関者、関司一<sup>レ</sup>処勘過。皆以<sup>二</sup>三人到<sup>一</sup>為<sup>二</sup>先後<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>停擁<sup>一</sup>。雖<sup>二</sup>廢務日<sup>一</sup>、亦不<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>停限<sup>一</sup>。若津梁阻<sup>レ</sup>関須<sup>二</sup>得<sup>一</sup>停擁。而<sup>二</sup>処勘度<sup>一</sup>者、而<sup>二</sup>処官司覆驗聽<sup>レ</sup>過。其不<sup>レ</sup>依<sup>二</sup>過所<sup>一</sup>別向<sup>二</sup>余関<sup>一</sup>者、不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>聽<sup>二</sup>其出入<sup>一</sup>。

本条の内容は、次の五点にまとめられよう。

- ①「関司一<sup>レ</sup>処勘過」規定
- ②行人と過所の勘検は到着順に行い、通行を滞留させない。

- ③たとえ廢務の日であっても、勘過を停留させてはならない。
- ④「若津梁阻<sup>レ</sup>関須<sup>二</sup>得<sup>一</sup>停擁」者、而<sup>二</sup>処官司覆驗聽<sup>レ</sup>過」規定
- ⑤過所に記載されていない経路上の関の通過については、これを禁止する。

水関にかかわるのは④の規定であるが、本条はあくまでも宋令であるため、藍本となった唐開元二十五年令に対応する規定が存在したかどうかを検証せねばならない。そこでまず、天聖令と同じく唐令を母法とする日本令（養老令）条文との比較検討を行うことから、唐令の復原に取りかかりたい。

内容①は対応規定を見出せないものの、②は養老関市令2行人出入条が照応する。

凡行人出<sup>二</sup>三人関津<sup>一</sup>者、皆以<sup>二</sup>三人到<sup>一</sup>為<sup>二</sup>先後<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>停擁<sup>一</sup>。さらに養老関市令3行人度関条には内容⑤に対応して、

凡行人度<sup>レ</sup>関者、皆依<sup>二</sup>過所<sup>一</sup>々々載関名<sup>一</sup>勘過。若不<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>詣、別向<sup>二</sup>余関<sup>一</sup>者、関司不<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>隨便聽<sup>一</sup>其出入。

とあることから、前掲宋2条の傍線部については、唐令にも存在したと考えてよい。よって、内容②・⑤は、同様の規定が唐令にも存在したものと判断できる。

ところで、具体的に条文の復原を行う前に解決しなければならぬ点がある。それは、宋2条に対応する養老令が二条に分かれており、冒頭句の「行人度関者」の文言が養老令第2条ではなく第3条と一致する点である。対応唐令は、そもそも一条であったのだろうか。あるいは、養老令のように二条に分かれたのだだろうか。

管見では、現段階でこの疑問を直接解決できる史料は見出せない。しかし、条文の中間に位置する③・④の規定が養老令に存在しないことや、養老令第2条が関の出入、第3条が過所の記載に即した勘過、という形でそれぞれ内容的に完結した条文の体を為している点を重視すべきだろう。すなわち、孟彦弘氏が述べるごとく唐令は宋令と同様に一条であり、日本令は継受の際に規定の削除と条文の分割を行ったものと推測できるのである。<sup>10)</sup>

以上、養老令2・3条に対応する唐令が、宋2条と同じく一条であったという前提を確認した。そして対応唐令は、既に孟氏によって次のように復原案が提示されている。

諸行人度<sub>レ</sub>関者、皆以<sub>二</sub>人<sub>一</sub>到<sub>二</sub>為<sub>二</sub>先後<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>停擁<sub>一</sub>。……其不<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>詣、別向<sub>二</sub>余<sub>一</sub>関<sub>二</sub>者、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>聽<sub>二</sub>其随<sub>レ</sub>便出入<sub>一</sub>。

孟氏は内容②・⑤についてのみ復原し、前者は宋2条の字句を、後者は養老令3条を採用した。「……」の部分は、規定の存在を想定しつつも、具体的な復原を留保している。以下、氏の検討と重なる点もあるが、参考となる史料を見出せないため復原できない③を除く、内容①・④について個別に検討を行う。なおその際の手法については、唐代前半期の関における勘検実態と宋2条との照合を通じて、唐令における当該規定の存否に迫ることとしたい。

# 1 「関司一処勘過」規定について

内容①の「関司一処勘過」とは、具体的に何を意味しているのだろうか。後段の検討にもかかわるため、前提作業として唐代の関の

内部構造を考えてみたい。

まず、『故唐律疏議』衛禁律25私度関条疏文には「水陸等関、両処各有<sub>二</sub>門禁<sub>一</sub>」とあって関門がみえ（次章で述べるごとく、天聖関市令宋9条には関門の開閉規定がある）、同条の疏文「水陸関棧、兩岸皆有<sub>二</sub>防禁<sub>一</sub>」とある規定からは、水関や陸関に「棧」が存在することがうかがえる。この「棧」は、関が設置された谷にかけのかけはしを指すほか、『故唐律疏議』名例律43共犯罪而本罪別条の「及私<sub>二</sub>度越度関棧垣籬<sub>一</sub>者」部分に附された疏文に「関謂<sub>二</sub>檢判之処<sub>一</sub>、棧謂<sub>二</sub>塹柵之所<sub>一</sub>」とあることから、関にめぐらされたほりや柵の存在も示している。「関棧」という用語は、奴婢の逃亡にかかわる天聖捕亡令不行唐3条にも「若度<sub>二</sub>関棧<sub>一</sub>捉獲者」とみえる。また、関の官吏である典事の職掌には「掌<sub>二</sub>巡<sub>二</sub>剗鋪<sub>一</sub>及雜<sub>二</sub>当<sub>上</sub><sub>一</sub>」とあり、剗と棧は同義であることからすれば、棧の周辺に関吏の執務所や兵士が詰める兵営など各種の建物が存在したことがわかる。

そして唐代後半期の事例であるが、杜牧「春尽途中」に「独倚<sub>二</sub>関亭<sub>一</sub>還把<sub>二</sub>酒<sub>一</sub>」とあることは、通行する官人が休む宿舎の存在も推測せしめる。このほか、鉄門関について歌った岑参「題<sub>二</sub>鉄門関楼<sub>一</sub>」（『全唐詩』卷一九八）に「試登<sub>二</sub>西楼<sub>一</sub>望」とあり、警戒のための楼閣が建てられていたことも想定できるだろう。

以上のように唐代の関は、ほりや柵で圍繞され、内部には楼閣や検問所といった各種の建物を含み込むという構造を有していた。ここで、関を通過するための通行証である過所の勘検が行われたのである。<sup>15)</sup> かような関の施設構造をふまえたとき、内容②が過所を勘検

する際の行人滞留に対する禁止規定であることをあわせて考えれば、内容①は関城内部の一箇所で行人の勘検を実施することを意味していると解せよう。内容④の「両処勘度」が特殊規定となつてゐることは、この理解を支持する。よつて現段階では個別の字句を復原する根拠史料を見出せていないものの、「関司一処勘過」という原則は円滑な勘検業務のために不可欠な規定であり、唐令にも存在した可能性が高いと考えられる。

## 2 「若津梁阻レ関須三両処勘度」者、両処官司覆驗聴レ過」の内実

内容④の「若し津・梁の関を阻て須く両処にて勘度すべき者は、両処の官司、覆驗して過ぐることを聴せ」とは、具体的にどのような規定なのだろうか。孟氏は、唐代の実例を見出せず詳細は不明とする。しかし私見では、関と津・梁とのかかわりを検討すること、本規定の意味を理解できるように思う。以下、唐代の実態に即して考えていきたい。

『唐六典』卷七、尚書工部水部郎中員外郎の項には、次のようにある。

凡天下造舟之梁四、〈河三、洛一。河則蒲津・大陽・盟津、一名河陽。洛則孝義也〉石柱之梁四、〈洛三、灊一。洛則天津・永濟・中橋、灊則灊橋也〉木柱之梁三、〈皆渭川也。便橋・中渭橋・東渭橋。此举三京都之衝要一也〉巨梁十有一、皆国工修之。其余皆所管州县随レ時营葺。（註省略）其大津無レ梁、皆給三船人二、量三其大小難易一、以定三其差等一。〈白馬津船四艘、龍

門・会寧・合河等関船並三艘、渡子皆以三当処鎮防人一充。渭津関船二艘、渡子取三永豐倉防人一充。（中略）会寧船別五人、興德船別四人、自余船別三人。（下略）

交通の要衝にあたる大河の渡河点（すなわち大津）には、梁をかけたり渡船を設置しており、これらは尚書工部の水部郎中・員外郎の管理下におかれていた。梁は、浮船を並べて橋とする浮梁、石柱で支える梁、そして木柱の梁の三種類があり、梁をかけない場合は渡船を設置して往來の便宜を図った。

ここで注目したいのは、浮梁がかけられた大津として同州蒲津関が、渡船を設置したものとして同州龍門関・会州会寧関・嵐州合河関・華州渭津関がみえる点である。『唐六典』卷六の尚書刑部司門郎中員外郎の項によれば、唐代開元年間の関は京城四面関以下、その重要度に従つて上中下の三等にランク分けされていた。<sup>(16)</sup>これによると蒲津関は上関、龍門・会寧・合河・渭津の諸関は中関に位置づけられており、上記の五関は渡河点の関、すなわち水関であることがわかる。したがって、「若し津・梁の関を阻て」というのは、梁や渡船を利用する大河の渡河点に、関を設けて検察する場合を指すと考えられよう。

それでは、「須く両処にて勘度すべき者は、両処の官司、覆驗して過ぐることを聴せ」とは具体的にどのような実態を示すのだろうか。この問題を考えるにあたり、本項では会州会寧関を取り上げる。敦煌発見の開元二十五年水部式残卷には、次のような規定がみえる。<sup>(17)</sup>

会寧関有<sup>二</sup>船伍拾隻<sup>一</sup>。宜<sup>レ</sup>令<sup>下</sup>所管、差<sup>三</sup>強了官<sup>一</sup>檢校着<sup>レ</sup>兵防守<sup>上</sup>。勿<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>北岸停泊<sup>一</sup>。自余縁河堪<sup>レ</sup>渡處、亦委<sup>三</sup>所在州軍<sup>一</sup>、嚴加<sup>二</sup>捉搦<sup>一</sup>。

会寧関は黄河南岸に位置し、先の『唐六典』の記事にみえるように渡船が配備され便宜を図っていたが、本条によれば北岸には停泊させず、南岸のみで渡船の管理を行っていたことが知られる。『唐六典』では会寧関の渡船は三艘とあり、本条の五十隻と大きく齟齬するが、これは日野開三郎・愛宕元両氏が指摘するように、『唐六典』にみえる三艘は官用のためと考えられる。よって、実際には多くの渡船が行人を運んでいたことがうかがえよう。指定した地点以外での渡河を厳しく取り締まっていたのは、会州城の西北二百里（約一二キロ）に位置する新泉守捉の兵士であったと考えられる。<sup>(19)</sup>

ここで留意したいのは、唐代において行人を檢察したのは関だけではなく点である。開元二十年（七三二）石染典過所に「路由鉄門関鎮戍守捉、不<sup>レ</sup>練<sup>二</sup>行由<sup>一</sup>」、また凹珍将来の大中九年（八五五）越州都督府過所に「恐所在州県鎮鋪関津堰寺、不<sup>レ</sup>練<sup>二</sup>行由<sup>一</sup>」とあること<sup>(20)</sup>、本貫地を離れて移動する行人は、州・県の行政機構のみならず、鎮・守捉といった軍事拠点など様々な場所で身元や移動目的の檢察をうけていた。

よって愛宕氏が推測するように、北岸でも厳しく檢察が行われたものと考えられる。『旧唐書』地理志の会州烏蘭県には「烏蘭。後周県、置在<sup>二</sup>会寧関東南四里<sup>一</sup>。天授二年、移<sup>二</sup>於関東北七里<sup>一</sup>」とみえ、元来会寧関の東南四里の地点にあった烏蘭県城を、天授二

年（六九二）に関の東北七里の場所へ移動させたことがわかり、北岸では烏蘭県城で過所の勘検を行った可能性がある。一方で愛宕氏は、『新唐書』地理志に「烏蘭。へ上。武徳九年置。西南有<sup>二</sup>烏蘭関<sup>一</sup>」とみえることから、北岸に烏蘭関を置いて檢察したとする。しかし、それは少なくとも唐代前半期では当てはまらないように思われる。

なぜなら、かつて礪波護氏の研究に導かれつつ旧稿で述べたように、唐代前半期（特に開元年間）の関は『唐六典』巻六にみえる二十六関のみであったと考えられるからである。烏蘭関はこの二十六関に含まれておらず、『旧唐書』地理志や『元和郡県図志』には烏蘭関の存在を見出せない。青山定雄氏が指摘するように、唐代後半期には藩鎮によって多くの関が設けられたことからすれば、『新唐書』にみえる烏蘭関は、唐代後半期になって置かれたのであろう。私見では、烏蘭橋の奪取と関係すると考える。

『資治通鑑』巻二三五、徳宗貞元十六年（八〇〇）五月条には「靈州破<sup>二</sup>吐蕃於烏蘭橋<sup>一</sup>。へ唐書地理志、会州烏蘭県有<sup>二</sup>烏蘭関<sup>一</sup>。橋当<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>関外黄河上<sup>一</sup>」とあり、このときに靈州の軍勢が吐蕃を烏蘭橋で破ったことがわかる。本註には「唐書地理志」を引用して烏蘭関がみえるものの、現行の『旧唐書』地理志には確認できない。この烏蘭橋は、以後も唐と吐蕃の双方にとつての懸案事項であったことが知られる。<sup>(21)</sup>

（前略）…、元和中、愿・愬兄弟在<sup>二</sup>方鎮<sup>一</sup>、佞檢校工部尚書・靈州大都督府長史・朔方靈鹽節度使。先是、吐蕃欲<sup>レ</sup>成<sup>二</sup>烏蘭

橋於河壩<sup>一</sup>、先貯<sup>二</sup>材木<sup>一</sup>、朔方節度使每遣<sup>レ</sup>人潛載<sup>レ</sup>之、委<sup>二</sup>於河流<sup>一</sup>、終莫<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>成。至<sup>レ</sup>是、蕃人知<sup>二</sup>秘貪而無<sup>レ</sup>謀、先厚遣<sup>レ</sup>之、然後併<sup>レ</sup>役成<sup>レ</sup>橋、仍築<sup>二</sup>月城<sup>一</sup>圍守<sup>レ</sup>之。自<sup>レ</sup>是朔方禦<sup>レ</sup>寇不<sup>レ</sup>暇、邇上至<sup>レ</sup>今為<sup>レ</sup>恨。

先の貞元十六年の戦闘によって、烏蘭橋は失われてしまったのだらうか。これ以降、朔方軍は吐蕃の烏蘭橋設置を防いできたが、元和四年（八〇九）に靈州大都督府長史・朔方靈塩節度使へ就任した王侁が吐蕃の奸計に乗せられて烏蘭橋を合同で架橋した<sup>(27)</sup>後、橋自体は吐蕃に制圧されてしまったことがわかる。烏蘭関の設置時期は定かでないが、かような烏蘭橋の存在が、関を新置する原因になったものと考えられる。

以上より、勘検の実施を直接示す史料は見出せないものの、唐代前半期の会州における黄河渡河点では、南岸の会寧関、北岸の烏蘭県城の二箇所で行人を勘検していた（＝「両処勘度」）可能性があると言えよう。こうした渡河点の両岸における勘検の実態は、京城四面関の一つである蒲津関から、さらに詳しくうかがい知ることができる。

## 二 唐代の蒲津関と蒲津橋

同州蒲津関は京城四面関の一つに数えられ、南北方向に流れる黄河を渡り、長安へ向かう際の際の要地におかれた水関である。蒲津関の変遷とその構造については、愛宕元氏の詳細な考察があるため、以<sup>(28)</sup>

下これに多くを負いつつ、蒲津関の構造と勘検の実態を検討する。

蒲津関は先述のように上関であり、令（従八品下）・丞（正九品下）・録事・府・史・典事・津吏の官吏が配された<sup>(29)</sup>が、その属する州県には変遷があった。『唐六典』が編まれた開元年間では黄河西岸に位置する同州朝邑県であった<sup>(30)</sup>が、安史の乱後の乾元三年（七六〇）には、蒲州（黄河東岸）から昇格した河中府に同州朝邑県を帰属させた関係で、河中府に属した<sup>(31)</sup>。その後、大暦五年（七七〇）に朝邑県西部が同州に復帰したが、残された東部（すなわち黄河西岸付近）を割いて河西県を別置したため、河中府河西県に属し、以後唐代後半期を通じて基本的に変更は無かった。黄河渡河点の西岸を河西県とし河中府所属にしたのは、蒲津関が安史の乱において京師防衛の重要地点となっており、管理体制を再強化した<sup>(32)</sup>ものと考えられる。

地理的にみると、蒲津は黄河に大きな中州が生じている地点であり、浮橋を設置・維持するのに適当であった。戦時下でも必要に応じて浮梁が造られたことは、時期は遑るものの、西魏大統三年（五三七）正月に宇文泰が竇泰と戦を交える際に「東魏寇<sup>二</sup>龍門<sup>一</sup>、屯<sup>二</sup>三軍蒲坂<sup>一</sup>、造<sup>二</sup>三道浮橋<sup>一</sup>度<sup>レ</sup>河。又遣<sup>二</sup>其将竇泰趣<sup>二</sup>潼関<sup>一</sup>、高敖曹圍<sup>二</sup>中洛州<sup>一</sup>上。太祖出<sup>二</sup>三軍廣陽<sup>一</sup>、召<sup>二</sup>諸将<sup>一</sup>曰、賊今倚<sup>二</sup>吾三面<sup>一</sup>、又造<sup>二</sup>橋於河<sup>一</sup>、示<sup>レ</sup>欲<sup>二</sup>必渡<sup>一</sup>。是欲<sup>二</sup>綴<sup>二</sup>吾軍<sup>一</sup>、使<sup>二</sup>西竇泰得<sup>二</sup>西入<sup>一</sup>耳。……（下略）」とあることからうかがえる。<sup>(34)</sup>また隋末の状況でもあるものの、『資治通鑑』に「朝邑法曹武功靳孝謨、以<sup>二</sup>蒲津・中潭二城<sup>一</sup>降。〔隋志、朝邑県、属<sup>二</sup>馮翊郡<sup>一</sup>、後魏曰<sup>二</sup>南五泉<sup>一</sup>、西魏改

レ焉。其地当蒲津橋西<sup>③</sup>、唐改為三河西県、梁大河為レ橋、故有三中潭<sup>④</sup>。…（下略）とみえ、中州には中潭城が築かれており、浮梁を中途で繋留していたことに留意しておきたい。

唐代では、先に引用した『唐六典』にあるごとく浮橋がかけられており、竹索によって浮船を繋留していた。唐水部式残卷に、その維持にかかわる細則を見いだすことができる<sup>⑤</sup>。

（前略）…、大陽・蒲津橋竹索、每三年二度、令三司竹監給<sup>⑥</sup>レ竹、役三津家水手<sup>⑦</sup>造充。其旧索、每委三所由一檢覆、如斟量牢好、即且用、不<sup>⑧</sup>得三浪有<sup>⑨</sup>三毀換<sup>⑩</sup>。其供<sup>⑪</sup>橋雜匠、料三須多少<sup>⑫</sup>、預申三所司<sup>⑬</sup>量配。先取三近橋人<sup>⑭</sup>充。若無三巧手<sup>⑮</sup>、聽<sup>⑯</sup>以<sup>⑰</sup>次差配、依<sup>⑱</sup>番追上<sup>⑲</sup>。若須<sup>⑳</sup>併使<sup>㉑</sup>、亦任<sup>㉒</sup>三津司<sup>㉓</sup>、与<sup>㉔</sup>管<sup>㉕</sup>匠州<sup>㉖</sup>相知、量<sup>㉗</sup>事折<sup>㉘</sup>番、随<sup>㉙</sup>須<sup>㉚</sup>追役<sup>㉛</sup>。如当年無<sup>㉜</sup>役、准<sup>㉝</sup>式徵課。

諸浮橋脚船、皆預備<sup>㉞</sup>三半副<sup>㉟</sup>。自余調度、預備<sup>㊱</sup>三一副<sup>㊲</sup>、随<sup>㊳</sup>闕代換。河陽橋船、於<sup>㊴</sup>潭<sup>㊵</sup>・洪二州<sup>㊶</sup>、役<sup>㊷</sup>三丁匠<sup>㊸</sup>造送。大陽・蒲津橋船、於<sup>㊹</sup>嵐<sup>㊺</sup>・石<sup>㊻</sup>・隰<sup>㊼</sup>・勝<sup>㊽</sup>・慈等州<sup>㊾</sup>、折<sup>㊿</sup>丁採<sup>㊿</sup>木浮<sup>㊿</sup>送橋所<sup>㊿</sup>、役<sup>㊿</sup>匠造供。若橋所見匠不<sup>㊿</sup>充、亦申<sup>㊿</sup>三所司<sup>㊿</sup>量配。…（後略）

右の規定から、黄河沿岸州の多大な負担によって浮橋が維持されていたことがわかる。その後、毎年のように発生する浮橋の流亡を防ぎ、軍隊などが危急の際にも確実に通行できるよう、開元十二年（七二四）に鉄鎖で舟を繋ぎ、鉄牛・鉄人を浮橋繋留の柱とした<sup>⑦</sup>。『通典』卷一七九、州郡九、河東郡蒲州河東県条には次のようにある。

大唐開元十二年、河兩岸開<sup>⑧</sup>東西門<sup>⑨</sup>、各造<sup>⑩</sup>鉄牛四、鉄人四<sup>⑪</sup>。

其牛下並鉄柱連<sup>⑫</sup>腹、入<sup>⑬</sup>地丈余、并前後鉄柱十六。

この事業について、愛宕氏は開元九年（七二二）作成の「東渭橋記」にみえる東渭橋の改修と蒲津橋改修を同一プロジェクトとみなし、『唐会要』卷八六、橋梁の「開元九年十二月九日、増<sup>⑭</sup>修蒲津橋<sup>⑮</sup>。經<sup>⑯</sup>以<sup>⑰</sup>三竹葦<sup>⑱</sup>、引<sup>⑲</sup>以<sup>⑳</sup>三鉄牛<sup>㉑</sup>。命<sup>㉒</sup>三兵部尚書張說<sup>㉓</sup>刻<sup>㉔</sup>石為<sup>㉕</sup>レ頌<sup>㉖</sup>」とある記事に従って、開元十二年ではなく九年に実施されたものとする<sup>⑯</sup>。

確かに、開元十一年の玄宗の太原巡行に備えて、鹵簿と軍隊が通行できるように改修したとする愛宕氏の見解は説得力がある。しかし、『唐会要』は王溥の手により蘇冕『会要』と崔鉉『統会要』を合体させ、大中七年（八五三）以降の記事を補って建隆二年（九六一）に成立した書物であるが、清乾隆年間の修改などをはじめとして、史料そのものに様々な問題が存在する<sup>⑰</sup>。さらに改修にあたった張説が記した「蒲津橋賛」には、

（前略）…、其旧制、横<sup>⑱</sup>經<sup>㉑</sup>百丈、連<sup>㉒</sup>艦<sup>㉓</sup>十艘、辯<sup>㉔</sup>修<sup>㉕</sup>竿<sup>㉖</sup>以<sup>㉗</sup>維<sup>㉘</sup>之、繫<sup>㉙</sup>三圍木<sup>㉚</sup>以<sup>㉛</sup>距<sup>㉜</sup>之。亦云<sup>㉝</sup>固矣。然每<sup>㉞</sup>三冬水未<sup>㉟</sup>合、春<sup>㊱</sup>沍初解<sup>㊲</sup>、流澌崢嶸、塞<sup>㊳</sup>川而下、如<sup>㊴</sup>礪如<sup>㊵</sup>白、如<sup>㊶</sup>堆如<sup>㊷</sup>阜。或<sup>㊸</sup>撥或<sup>㊹</sup>掘、或<sup>㊺</sup>磨或<sup>㊻</sup>切。綆<sup>㊼</sup>断航破、無<sup>㊽</sup>三歲不<sup>㊾</sup>有<sup>㊿</sup>。雖<sup>㊿</sup>下<sup>㊿</sup>残<sup>㊿</sup>三渭南之竹<sup>㊿</sup>、仆<sup>㊿</sup>中隴<sup>㊿</sup>坻之松<sup>㊿</sup>、敗<sup>㊿</sup>レ轍更<sup>㊿</sup>レ之。罄<sup>㊿</sup>不<sup>㊿</sup>三供胥<sup>㊿</sup>、津吏或罪、県徒告<sup>㊿</sup>レ勞、以為<sup>㊿</sup>常矣。開元十有<sup>㊿</sup>二載、皇帝聞<sup>㊿</sup>之曰、嘻、我其慮<sup>㊿</sup>哉。乃思<sup>㊿</sup>三索其極<sup>㊿</sup>、敷<sup>㊿</sup>三祐于下<sup>㊿</sup>。通<sup>㊿</sup>三其變<sup>㊿</sup>使<sup>㊿</sup>三人不<sup>㊿</sup>レ倦、相<sup>㊿</sup>三其宜<sup>㊿</sup>授<sup>㊿</sup>三其有司<sup>㊿</sup>。俾<sup>㊿</sup>三鉄代<sup>㊿</sup>レ竹、取<sup>㊿</sup>レ堅易<sup>㊿</sup>レ脆。…（後略）

とあり、玄宗が実感を以て改修を許可したのは、先だって竹索で繋

げられた蒲津橋を自らが通り、その不安定さを直に体験していたからとも解せよう。そして杜祐の『通典』、蒲津橋の改修を担当した張説が記す「蒲津橋賛」といった同時代史料、『新唐書』地理志が開元十二年とすることは、史料の信頼性という点で優っている。よって開元十二年の大改修をもって、蒲津橋は鉄鎖で浮船を繋ぐ形式に変化したと位置づけることができる。

さて、かような状態と相成った蒲津橋を、唐代後半期に二人の日本人僧侶が通行した。円仁と円珍である。幸いなことに各々記録を残しており、円珍については蒲津関の判語が記された過所の実物が現存している。以下、その記録をもとにしつつ、蒲津関における勘検の実態を考えてみたい。

まず、八三八年に入唐した円仁である。彼は五台山を巡礼した後、長安へ向かうのであるが、その際に東岸から西岸へ向かって蒲津関を通過している。『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）八月十三日条には、次のようにある。<sup>(44)</sup>

十三日。早發。南行卅里、到<sub>二</sub>辛駅<sub>一</sub>、店頭断中。齋後、南行卅五里、到<sub>二</sub>河中節度府<sub>一</sub>。黄河從<sub>二</sub>城西<sub>一</sub>西<sub>一</sub>向<sub>レ</sub>南流。黄河從<sub>二</sub>河中府<sub>一</sub>已北向<sub>レ</sub>南流、到<sub>二</sub>河中府南<sub>一</sub>便向<sub>レ</sub>東流。從<sub>二</sub>北入<sub>一</sub>、舜西門出。側有<sub>二</sub>蒲津関<sub>一</sub>。到<sub>レ</sub>関得<sub>二</sub>勘入<sub>一</sub>、便渡<sub>二</sub>黄河<sub>一</sub>。浮<sub>レ</sub>船造<sub>レ</sub>橋、闊二百歩許。黄河西流造<sub>レ</sub>橋兩處。南流不<sub>レ</sub>遠兩派合。都過<sub>二</sub>七重門<sub>一</sub>、向<sub>レ</sub>西行五里、到<sub>二</sub>河西県八柱寺<sub>一</sub>宿。寺在<sub>二</sub>県城西<sub>一</sub>、去<sub>レ</sub>県百歩來地。

河中府城（河中節度府）に到達してから蒲津橋を渡る際に、円仁

のたどったルートが記されている。当時、河中府城は河中府の治所であると同時に郭下県の河東県城も兼ね、大城（外郭城）と子城（牙城、すなわち舜城）から成っていた。<sup>(45)</sup>蒲津橋の状況については、「浮<sub>レ</sub>船造<sub>レ</sub>橋、闊二百歩許。黄河西流造<sub>レ</sub>橋兩處。南流不<sub>レ</sub>遠兩派合」という記述から、蒲津浮梁が隋末と変わらず、中洲を媒介として二本の浮梁で構成されていたことがわかる。

円仁は河中府を通過した後、「蒲津関」に至って勘検を受け、黄河を渡っているのであるが、既に小野勝年・愛宕両氏が指摘することくここに大きな問題がある。本章冒頭で変遷を追ったように、このとき蒲津関は河中府河西県、すなわち黄河の西岸にあったはずである。具体的には、『元和郡県図志』河中府河東県条に「蒲坂関、一名蒲津関、在<sub>二</sub>県西四里<sub>一</sub>」とみえることから、河中府城（すなわち河東県城）の西四里（約二二四〇メートル）の地点にあった。北宋の地誌である『太平寰宇記』によれば、河東県城と河西県城の距離は四里とあるので、<sup>(46)</sup>唐代でも黄河西岸であることはほぼ間違いないだろう。しかし、円仁は黄河東岸にある河中府城（大城）の北門から入城した後、城内にある舜城に入ってからその西門（愛宕氏の考察によれば大城の西門も兼ねる）をくぐり、河中府城の傍らにある蒲津関で勘検を受けている。これによると、河中節度府と黄河との間に蒲津関があり、そこで勘検を済ませてから浮梁を渡っていると解せるのである。

この点を考えるために、円珍の事例も併せて参照したい。『余芳編年雜集』所収の「請弘伝真言止観両宗官牒款状」には、<sup>(47)</sup>円珍が長



安から洛陽に向かうにあたって、黄河を西岸から東岸に渡った際の記述がみえる。

（前略）…、至<sub>二</sub>櫟陽県<sub>一</sub>、止<sub>二</sub>同州城<sub>一</sub>。次渡<sub>二</sub>蒲関<sub>一</sub>、即到<sub>二</sub>舜城<sub>一</sub>。則此河中府矣。見<sub>二</sub>黄河兩岸<sub>一</sub>、各有<sub>二</sub>鉄牛四頭<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>鎖繫<sub>レ</sub>脚縛<sub>レ</sub>船、為<sub>二</sub>浮橋之基<sub>一</sub>。…（後略）

同州城を發つてから蒲津関を渡り、それから河中府城内の舜城に至ったとする。このとき円珍は尚書司門発給の過所を所持しており、大中九年十一月四日に蒲津関で勘検をうけていた。

尚書省司門

福寿寺僧円珍年肆拾參。行者丁滿年伍拾。并隨

身衣道具功德等。リ）

韶廣兩浙已來関防主者。上件人貳。今月 日

得<sub>二</sub>三萬年県申<sub>一</sub>稱、今欲<sub>下</sub>帰<sub>二</sub>本貫<sub>一</sub>觀省、并往<sub>二</sub>諸道州

府<sub>一</sub>、巡<sub>中</sub>礼名山祖塔<sub>上</sub>。恐所在関津守捉、不<sub>レ</sub>練<sub>二</sub>行由<sub>一</sub>。請

給<sub>二</sub>過所<sub>一</sub>者。准<sub>レ</sub>狀勘<sub>二</sub>責狀<sub>一</sub>同。此正准給。符到奉行。

主事 袁參

都官員外郎判「祇」

令史 戴敬棕

書令史

大中玖年拾壹月拾伍日下

（別筆）

蒲関。十二月四日。勘出。

丞 郢

『余芳編年雜集』の記事からは、残念ながら蒲津関が黄河の東岸・

西岸いずれにあったのかは不明瞭である。しかし、例えば、渡<sub>二</sub>蒲津橋<sub>一</sub>や『入唐求法巡礼行記』にみえる「渡<sub>二</sub>黄河<sub>一</sub>」といった表現ではなく、「渡<sub>二</sub>蒲関<sub>一</sub>」という書きぶりとなっているのは、当時の状況を示唆しているように思われる。つまり、蒲津橋を渡ることが「蒲関を渡る」と表現されるほど、関と橋が一体のものとして認識されていたのである。円珍は黄河西岸から東岸に渡ったため、まず河西県にある蒲津関で勘検を受けたのであるが、その一方で円仁が黄河東岸に「蒲津関有り」と記したのは、小野氏が指摘するように、東岸でも関と同様の厳しい勘検が行われており、そのための施設が存在したからと考えられる。西岸の蒲津関における勘過が記されていないのは、東岸での検察を再度チェックするという形態（すなわち「覆驗」であったため、特記しなかったのだろう）。

さらに、「すべて七重門を過ぎ、西に向かひて行くこと五里にして、河西県八柱寺に到りて宿る」とある一節に注目したい。円仁は東岸で勘検を受けた後、黄河を渡り始めてからは浮橋と黄河の流路の様相のみを記し、どこを通過したのか具体的に記していない。ただ、「蒲津関」の次に記される個別地点が当日の宿泊地である河西県八柱寺であることから、「都過<sub>二</sub>七重門<sub>一</sub>、向<sub>レ</sub>西行五里」というのは、河中府城から八柱寺に到るまでを示していると理解できよう。その上で愛宕氏は、先に引用した『資治通鑑』の記事を根拠に、黄河の中州に中潭城が存在することを前提として、次のようなルートを想定した。

河中府大城北門↓舜城東門↓舜城西門↓中潭城東門↓中潭城西

門↓河西県城東門↓河西県城西門

しかし、これには疑問がある。なぜなら、関門とみなせる門が含まれていないからである。天聖関市令宋9条は、関門の開閉について次のように規定する。

諸関門並日出開、日入閉。管<sub>レ</sub>鑰、関司官長者執<sub>レ</sub>之。

対応する唐令条文は、孟彦弘氏によって「諸関門、並日出開、日入閉。」と復原されている。<sup>(49)</sup> 本条が示すように、関には必ず関門が設けられるため、円仁は蒲津関の関門を通ったはずである。円仁は「関に到りて勘入することを得」と記しているから、(正確には蒲津関は西岸に存在したが)少なくとも円仁の意識としては関門を通過したものと理解できる。よって、西岸の蒲津関には、当然関門が存在したとみなせるだろう。中潭城については、円仁が一切言及していないことから、円仁が認識するところの「七重門」に積極的に数える必要は無いように思われる。舜城東門も、円仁は河中府城の出入を「北より入り、舜西門より出づ」とのみ記しているので、同様の判断を下せよう。当時の蒲津関・蒲津橋の実態をふまえるのはもちろん必須であるが、『入唐求法巡礼行記』はあくまで個人の旅行記であり、正史や地誌とは史料の性格が異なる。ここでは、『入唐求法巡礼行記』から抽出できる要素、そして記述からうかがえる円仁の意識をより重視すべきであると考ええる。

それでは、黄河東岸の検問所に門は存在しないのだろうか。ここで、前引の『通典』河東郡河東県条に「河兩岸開<sub>二</sub>東西門<sub>一</sub>」とあり、開元十二年の蒲津橋の改修において、浮橋の入口にそれぞれ東

門と西門を設けたことに注目したい。検問所を設けるにあたって、この東門付近は適切な地点であろう。『通典』と円仁が渡河した時期とでは約四十年の懸隔がある上に安史の乱も経ているので、開元年間と同じく東西門が存在したかどうかは確証がもてないが、一案として提示しておきたい。

以上より、愛宕氏の指摘をふまえつつ円仁が実際に通った門を通過順に示すと、次のようになる。円仁が述べる「七重門」を限定することは困難であるが、現段階では番号①～⑦を付した門を指すと考えておきたい。

①河中府大城北門↓(舜城東門) ↓②舜城西門↓③蒲津橋東門  
(東岸検問所) ↓(中潭城東門↓中潭城西門) ↓④蒲津橋西門  
↓⑤蒲津関関門↓⑥河西県城東門↓⑦河西県城西門

本章では、小野・愛宕両氏の研究に依拠しつつ、唐代蒲津関の構造について考察してきた。特に唐代後半期については、円仁・円珍の記録から検察の様相をうかがうことができた。すなわち、渡河点に設置された関については、河の兩岸で厳しく勘検が実施されており、西岸では蒲津関、東岸では検問所が設けられていた。これは、宋2条の「若津梁阻<sub>レ</sub>関須<sub>二</sub>両処勘度<sub>一</sub>者、両処官司覆驗聽<sub>レ</sub>過」という規定と合致すると考えられよう。規定に「両処関司」ではなく「両処官司」とあることは、兩岸を関と他の機関(県、もしくは特別に置かれた検問所)とで覆験することに由来すると理解できる。

蒲津関は唐代前半期において上関に数えられ、交通の要衝としての性格は後半期と変わりなかった。よって兩岸における勘検は、唐

代を通じて実施されたと推測される。前章の会寧関に対する検討結果も併せて考えるならば、当該規定は唐令にも存在した可能性が極めて高いと結論できるのである。

## おわりに

本稿では、北宋天聖関市令宋2条を取り上げ、藍本となった唐令条文の復原を試みた。具体的には、孟彦弘氏が復原した養老令との一致部分を確認した上で、「関司一処勘過」「若津梁阻<sub>レ</sub>関須<sub>二</sub>兩処勘度<sub>一</sub>者、兩処官司覆驗聽<sub>レ</sub>過」規定の存否について検討を加えた。字句を確実に復原する根拠史料は見出せなかったものの、関の構造や、会寧関・蒲津関といった渡河点の関の実態について考察した結果、唐令にも存在した可能性が極めて高いことが明らかとなった。

今回は、唐代の実態を検討することで宋令との合致点を見出し、藍本たる唐令条文の様相を探るという手法をとった。しかし、これはどうしても可能性の大小に留まってしまい、現状では唐令の復原手法としては限界があるように思われる。くわえて安史の乱後に増置された関の実態など論じ残した点は数多くあるが、すべて今後の課題とし、ひとまず擲筆したい。

## 注

- (1) 佐藤武敏「先秦時代の関と関税」(『甲骨学』十号、一九六四年)、一五八—一六一頁。
- (2) 佐藤氏前註(1)論文、一七〇—一七一頁。
- (3) 何双全「天水放馬灘秦墓出土地圖初探」(『文物』一九八九年第二期)参照。出土地圖のカラー図版は、大阪府立近つ飛鳥博物館の展示図録『シルクロードのまもり—その埋もれた記録』(大阪府立近つ飛鳥博物館、一九九四年)、三三—三三頁で確認した。
- (4) 藤田勝久「戦国秦の領域形成と交通路」(『中国古代国家と郡県社会』所収、汲古書院、二〇〇五年。初発表一九九二年)参照。
- (5) 『故唐律疏議』衛禁律25私度関条疏文を参照。唐代の関については、青山定雄「唐・五代の関津と商税」(『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』所収、吉川弘文館、一九六三年。初発表一九五〇年)、礪波護「唐代の畿内と京城四面関」(『唐代史研究会編』『中国の都市と農村』所収、汲古書院、一九九二年)、程喜霖「唐代過所研究」(『中華書局』、二〇〇〇年)、宋代については曹家齐「宋代交通管理制度研究」(河南大学出版社、二〇〇二年)などが代表的な研究として挙げられる。
- (6) 本稿で引用する史料は、『故唐律疏議』は律令研究会編『訳註日本律令律本文篇』(東京堂出版)、養老令は日本思想大系本(岩波書店)、『周書』『旧唐書』『新唐書』『唐六典』『通典』『元和郡縣圖志』『資治通鑑』『太平實字記』『全唐詩』は中華書局本に依拠した。史料中の本註は山括弧で表記する。
- (7) 北宋天聖令の発見と公表の経緯については、大津透「北宋天聖令の公刊とその意義」(『律令制研究入門』所収、名著刊行会、二〇一一年。初発表二〇〇七年)を参照。天聖令の引用にあたっては、「右並因旧文、以新制参定」とされた条文群を宋令(具体的には宋1条など)、「右令不行」とされた条文群を不行唐令(不行唐1条など)と呼称する。なお天聖令の本文は、天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令課題組校証「天一閣藏明鈔本天聖令校証」附唐令復原研究(中華書局、二〇〇六年。以下、『天聖令校証』と略称)の校録本に依り、本書の校訂を参考にしつつ提示した。

(7) 仁井田陞『唐令拾遺』(東京大学出版会、一九六四年。初版は東方文化

- 学院、一九三三年）。池田温編集代表『唐令拾遺補』（東京大学出版会、一九九七年）。なお、かつて別稿で明らかにしたように、『唐令拾遺』『唐令拾遺補』の一乙条は、唐閔市令第一条の本註（ただし開元三年令のみか）として復原を改めるべきである。拙稿「律令閔制度の構造と特質」（『東方学』一一七輯、二〇〇九年）、十一、十三頁参照。
- (8) 孟彦弘氏は、『天聖令校証』下冊の校注で「兩処官司」を「兩処閔司」に改めるが、本文で後述するように、底本のまま「兩処官司」で良いと考える。
- (9) 孟彦弘「唐閔市令復原研究」（『天聖令校証』下冊）参照。以下、孟氏の論は全てこれに拠る。
- (10) 唐閔市令条文排列の復原については、前註（7）拙稿の表1を参照されたい。
- (11) 棧道については、唐實澄編『中国古代橋梁』（中国建筑工業出版社、二〇一〇年）の「棧閣」に詳しい。
- (12) 『唐六典』卷三十、三府督護州県官吏。
- (13) 詳細は、前註（7）拙稿の註（37）を参照。
- (14) 本文は、松浦友久・植木久行編訳『杜牧詩選』（岩波文庫、二〇〇四年）に拠った。
- (15) 唐代の過所については、前註（5）の程氏著書のほか、礪波護「唐代の過所と公驗」（礪波護編『中国中世の文物』所収、京都大学人文科学研究所、一九九三年）、杉井一臣「唐代の過所発給について」（布目潮風博士記念論集刊行会『東アジアの法と社会』所収、汲古書院、一九九〇年）、荒川正晴「唐の通過公証制度と公・私用交通」（『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』所収、名古屋大学出版会、二〇一〇年）などを参照。
- (16) 礪波氏前註（5）論文、および前註（7）拙稿を参照。
- (17) 本文は、T.Yamamoto, O.Ikeda and M.Okano eds. *Tun-huang and Turfan Documents Concerning Social and Economic History. I Legal Texts* (The Toyo Bunko) に拠る。この水部式残巻が開元二十五年式と判断できることについては、仁井田陞「敦煌発見唐水部式の研究」（『中国法制史研究』法と慣習・法と道徳）所収、東京大学出版会、一九八〇年。初発表（一九三六年）を参照。式文の釈読にあたっては、佐藤武敏「敦煌発見唐水部式残巻譯注」（『中国水利史研究』二号、一九六七年）を参考にした。
- (18) 日野開三郎「末端公務服事による課見不輸」（『唐代租調庸の研究』Ⅱ課輸篇 上）所収、汲古書院、一九七五年）の四七三、四七四頁、愛宕元「唐代の橋梁と渡津の管理法について」（梅原郁編『中国近世の法制と社会』所収、京都大学人文科学研究所、一九九三年）の六〇、六一頁を参照。
- (19) 愛宕元氏は前註（18）論文で、『元和郡縣圖志』卷四十、隴右道下、涼州の記事「新泉軍（会州西北二百里。大足初、郭元振置。管兵七千人。西去理所四百里也）」を根拠に「新泉軍」とする。しかし、新泉軍は開元五年（七一七）に廃されて新泉守捉となつていたので（『新唐書』卷三七、志二七、地理一の会州会寧郡の本註に「有新泉軍、開元五年廢為二守捉」とある）、『唐六典』や開元二十五年水部式が成つた時期においては新泉守捉とすべきである。『元和郡縣圖志』が「新泉軍」とするのは、誤謬であろう。新泉守捉の存在は、『唐六典』卷五尚書兵部郎中の項や、『新唐書』卷五十、志四十、兵の記事にも確認できる。新泉軍が守捉に格下げとなつたことについては、日野開三郎「唐代藩鎮の跋扈と鎮將」（『日野開三郎 東洋史学論集 第一卷 唐代藩鎮の支配体制』所収、三一書房、一九八〇年。初発表一九三九・一九四〇年）、四二、四二五頁参照。
- ただこのように考えた場合、水部式に「所在州軍」とある点が問題となるが、式条が立てられた時点では新泉軍だったことを示しているのだらう。つまり、水部式本条の立条は、開元五年以前に遡るものと考えられる。
- (20) 「唐開元二十年瓜州都督府給西州百姓游擊將軍石染典過所」（『吐魯番出土文書』図録本第肆冊、文物出版社、二七五頁。73TAM5098.13）。円珍將來の越州都督府過所の本文は、礪波氏前註（15）論文の釈読に拠った。
- (21) 『旧唐書』卷三八、志十八、地理一、閔内道、会州烏蘭県。
- (22) 嚴耕望氏が詳細に検討したように、烏蘭県城・会寧閔・会寧県城（会州城）の位置関係は諸史料によって大きく食い違いがある。その原因は情報の錯綜だけでなく、黄河の流路の変更に影響しているようである。本稿では、烏蘭県城と会寧閔が黄河の両岸にそれぞれ位置していたという点について、嚴氏の結論に従う。嚴耕望『唐代交通圖考 第二卷 河隴嶺西區』（上海古籍出版社、二〇〇七年）、四一三、四一六頁。
- (23) 『新唐書』卷三七、志二七、地理一、会州会寧郡、烏蘭県。

- (24) 礪波氏前註(5) 論文、および前註(7) 拙稿の註(32) を参照。  
 青山氏前註(5) 論文参照。
- (25) 『旧唐書』卷一三三、列伝八三、王伾。このほか『資治通鑑』卷二三九、唐紀五五、憲宗元和八年(八一三) 七月条に、同内容の記事が付されている。
- (26) 王伾の靈州大都督府長史・靈塩節度使への着任は、『旧唐書』卷十四、本紀十四、憲宗元和四年六月丁丑条にみえる。
- (27) 愛宕元「唐代の蒲州河中府城と河陽三城」(『唐代地域社会史研究』所収、同朋舎、一九九七年。初発表一九九二年)。蒲津関についての愛宕氏の論は、全てこれに拠る。
- (28) 『唐六典』卷三十、三府督護州県官吏。
- (29) 『唐六典』卷六、尚書刑部司門郎中員外郎。『通典』卷一七三、州郡三、同州朝邑県。
- (30) 『旧唐書』卷三八、志十八、地理一、関内道同州。
- (31) 『元和郡県図志』卷十二、河東道一、河中府河東県・河西県。『旧唐書』卷三九、志十九、地理二、河東道河中府。『新唐書』卷三九、志二九、地理三、河東道河中府河西県。
- (32) 例えば、『旧唐書』卷二〇、列伝七十、郭子儀に「賊將崔乾祐守潼関。(至德：筆者注) 二年三月、子儀大破賊於潼関、崔乾祐退保蒲津。時永業尉趙復・河東司戸韓旻・司士徐昊・宗子李藏鋒等、陷賊在蒲州、四人密謀俟王師至則為内応上。及子儀攻蒲州、趙復等斬賊守陴者、開門納子儀。…(下略)」とみえる。
- (33) 『周書』卷二、帝紀二、文帝下、大統三年正月条。
- (34) 『資治通鑑』卷一八四、隋紀八、恭帝義寧元年(六一七) 八月戊午条。
- (35) 『唐六典』卷七、尚書工部水部郎中員外郎の本註部分にも、同様の細則がみえる。
- (36) 東岸の鉄牛・鉄人は、一九八九年に発掘された。現在、遺跡は蒲津渡遺址博物館として整備されており、筆者は二〇一一年九月四日に現地で見ることができた。鉄牛・鉄人の発掘・保存状況については、王澤慶「唐蒲津橋と黄河鉄牛鉄人」(『中国文物報』一九九一年第二〇期)、樊旺林・李茂林「唐鉄牛与蒲津橋」(『考古与文物』一九九一年第一期)、王西蘭「大唐蒲州」(山西古籍出版社、二〇〇五年)、蒲津渡遺址博物館編『蒲津渡遺址歴史文化図解』(二〇〇八年) などを参照。
- (37) 愛宕元「唐代東渭橋と東渭橋倉」(『京都大学教養部 人文』三二集、一九八六年)。「東渭橋記」残碑の拓本図版と翻刻については、董国柱「陝西高陵県耿鎮出土唐《東渭橋記》残碑」(『考古与文物』一九八四年第四期) を参照。
- (38) 『資治通鑑』卷二二、唐紀二八、玄宗開元九年(七二二) の末尾にも「新作蒲津橋、鎔鉄為牛以繫輓。(時鑄八牛、牛下有山、皆鉄也。夾岸以維浮梁)。蒲津東岸即河東県、西岸即河西県。(輓、居登翻、大索也)」とみえる。
- (39) 『旧唐書』卷八、本紀八、玄宗上、開元十一年正月丁卯条および三月庚午条。
- (40) 古畑徹「唐会要」の諸テキストについて(『東方学』七八輯、一九八九年、同「唐会要」の流伝に関する一考察(『東洋史研究』五七卷一号、一九九八年) を参照。
- (41) 「張説之文集」卷十三「蒲津橋賛」。本文は四部叢刊初編縮本(上海商務印書館縮印、明嘉靖丁酉刊本) に拠った。
- (42) 『新唐書』卷三九、志二九、地理三、河東道河中府河西県には「開元十二年鑄鉄牛、牛有二人策之、牛下有山、皆鉄也。夾岸以維浮梁」とあり、『太平寰宇記』卷四六、河東道七、蒲州河東県には「鉄牛。開元十二年、于河東県開東西門、各造鉄牛四、鉄人四。其牛下並鉄柱、連腹入地丈余、并前後鉄柱十六維橋跨河。至令存」とある。
- (43) 『入唐求法巡礼行記』の本文は、小野勝年「入唐求法巡礼行記の研究」第三卷(法蔵館、一九八九年。初版は鈴木學術財団、一九六四年) の校訂本文に拠った。以下、小野氏の見解は全てこれに拠る。
- (44) 以下、河中府城の内部構造については、愛宕氏前註(28) 論文の成果に拠っている。
- (45) 『太平寰宇記』卷四六、河東道七、蒲州河東県・河西県。
- (46) 本文は、仏書刊行会編『大日本仏教全書 二八冊 智証大師全集第四』(仏書刊行会、一九一八年) に拠った。
- (47) 京師では、尚書刑部司門が過所を発給することとなっていた(『唐六典』

卷六)。過所の発給過程については、前註(7)拙稿を参照。釈文は、礪波氏前註(15)論文に拠る。

(49) 孟氏は、宋9条に対応する養老関市令10関門条と一致する字句のみを唐令として復原しており、現段階では妥当な復原であると考ええる。

【付記】 成稿にあたっては、東方学会若手研究者支援事業研究会「中国北宋天聖令を用いた日唐律令制比較の基礎的研究」において報告を行い、参加者の方々から貴重な御教示を賜った。この場を借りて感謝申し上げたい。

本稿は、平成二十四年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(よしなが まさふみ 本学非常勤講師)